

セト研の歩み

平 口 哲 夫

セト研は、前身である日本海セトロロジー研究グループ、日本海セトロロジー研究会、そして現・日本セトロロジー研究会を通して用いることのできる、まことに便利な略称である。「名は体を表す」というように名称変更はただ名前が変わっただけではないが、略称が同じという点に「変わらない大切なものもある」ということが象徴されているように思う。名称変更を区切りとしてセト研の歩みをざっと振り返ってみよう。

1. 日本海セトロロジー研究グループの発足

セト研グループは、1988年（昭和63）3月3日、石川県能都町漁港にオウギハクジラ類（メソプロドン）が水揚げされたのをきっかけに、山田致知先生（金沢大学名誉教授）を中心として設立の話しが持ち上がり、同年12月2日から三日間の日程で開催されたシンポジウム「日本海と鯨類」（夢半島のと推進委員会主催）において正式に発足した。創立期のことについては、セト研の発足とシンポジウムの開催に向けて奔走した米田満氏（当時、北国新聞社論説委員）がセトケンニューズレター3～6号に情熱をこめて書いておられるので、詳しくはそれをお読みいただきたい。

ところでセト研が設立された1980年代の能登では、オウギハクジラ類の水揚げ・漂着だけでなく、鯨類関係の出来事が相次いだ。まず、1982年にのどじま臨海公園水族館の開館と能都町（現・能登町）真脇遺跡におけるイルカ骨多量出土があり、ついで1984年羽咋市滝海岸にコマッコウ漂着、さらに1985年七尾市大杉町で中新世層からクジラ化石1体分が発掘された。セト研の発足時に生物学・古生物学・水産学・考古学など様々な分野の研究者や愛好者が結集したのは、この10年間の出来事によるところが大きいと思う。事実、私がセト研創立に馳せ参じたのは、真脇遺跡イルカ骨の調査を担当していたからである。1988年11月30日付け、つまりシンポジウム直前に作成されたセト研名簿には、「通常会員」として29名が登録されている。その名簿には、顧問として大村秀雄先生（日本鯨類研究所顧問）の名が記されており、宮崎信之先生（国立科学博物館動物研究部）については交渉中とある。

第1回研究会（現在の大会に相当）は1990年5月19日、当時、金沢市東御影町にあった金沢サニーランド（金沢水族館併設）で開催された。以後、セト研の活動は本格化し、1991年3月には「日本海セトロロジー研究」創刊号の発行、1993年12月には「セトケンニューズレター」創刊号（第18号まで国本昭二先生が編集）の発行にこぎつけた。その2年後の1994年12月15日、セト研代表・山田致知先生が逝去されたことは、グループにとって大きな悲しみであり、痛手であったが、1995年度総会で、致知先生の弟子にあたる児玉公道

先生（熊本大学医学部教授）が2代目の代表に就任し、ご意志をついでさらに活動を進めることが確認された。

2. 「研究グループ」から「研究会」へ

セト研の発祥地である北陸の地にいる会員としては、児玉先生が金沢大学医学部助教授から熊本大学医学部教授に転任されたことだけでも歯の抜けたような感じだったのに加えて、致知先生のご長男にあたる山田格先生が新潟大学医学部助教授から国立博物館動物研究部に転任されたということから、児玉先生が代表交代を申し出られたとき、誰が3代目の代表になったらいいか、幹事会でだいぶ問題になった。結局、事務局のある金沢に住んでいる50歳代の会員が良かろうということで、1997年度総会で私が3代目の代表に選ばれた。

同年6月6日現在、個人会員は121名を数え、創立時の4倍の規模となっていた。ほかに団体会員9名、賛助会員3名、国外会員1名がいた。人数だけでなく、会員の研究活動も盛んに行なわれているので、もはや「グループ」というよりも「研究会」と称したほうがよいのではないかという声が強まってきた。また、会員の所在地も全国に及んでいることから、研究集会の開催地も福井・石川・富山・新潟県に限らず、全国各地で開催すればよいのではないかという意見も聞かれるようになった。

そこで、翌1998年は創立10周年にあたるということも考慮にいれて、第9回研究会を福岡市にあるマリンワールド海の中道・海洋生態科学館で開催することにした。また、私の勤務先の大学では、所属員が会長をつとめる学会に開催補助金を出す制度があることから、これに応募して発表要旨集などに必要な資金を得ることもできた。そして、第9回研究会に伴う総会において、会の名称を「研究会」とし、毎年開催する研究集会を「大会」と呼ぶように決議した。

3. 「日本海セトロロジー」から「日本セトロロジー」へ

その後、大会は第13回（2002）を東京、第14回（2003）を鳥取市、第16回（2005）を函館市で開催した。これは、セト研がフィールドの中心を日本海に置きながらも全国的に活動を展開してきたことの表れだと思う。この実態に合わせて、函館大会に伴う総会では、「日本海セトロロジー研究会」を「日本セトロロジー研究会」に改称するという提案がなされ、承認された。この改称は、2度にわたる会員アンケート調査の結果に従って提案されたものである。

函館大会の2ヶ月ばかり前に還暦を迎えていた私は、この大会に伴う総会で、50歳代の山田格先生に代表バトンを渡すことができほっとした。天国におられる山田致知先生も国本昭二先生も大いにお喜びのことと思う。